広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第208集

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

日曽木遺跡

2003

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

日曽木遺跡

福富町位置図（・は遺跡の位置を示す）

2003

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本報告書は平成14（2002）年度に調査を実施した沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る日曽木（ひそぎ）遺跡（賀茂郡福富町大字久芳（くば）字日曽木（ひそぎ）2223-1所在）の発掘調査報告である。

2　発掘調査は広島県東広島地域事務所との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　発掘調査は辻満久，濱岡才二が担当した。

4　出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は辻が中心となって行った。

5　本書の編集・執筆は辻が行った。

6　図版と挿図の遺物番号は同じである。また，使用した遺構の表示記号ＳＢは竪穴住居跡・段状遺構である。

7　本書で使用した北方位は第１図が真北で，その他はすべて磁北である。

8　第１図は国土交通省国土地理院発行の１：25,000の地形図（乃美）を使用した。

本文目次

1　はじめに …… (1)
2　位置と環境 …… (2)
3　調査の概要 …… (7)
4　遺構と遺物 …… (8)
5　まとめ …… (14)

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000） …… (3)
第2図　遺跡周辺地形図（1：5,000） …… (4)
第3図　遺跡地形図（1：1,000） …… (6)
第4図　遺構配置図（1：200） …… (7)
第5図　ＳＢ１実測図（1：60） …… (8)
第6図　ＳＢ２実測図（1：60） …… (9)
第7図　ＳＢ３実測図（1：60） …… (10)
第8図　出土遺物実測図（1：3） …… (11)

図版目次

図版1　a　遺跡全景（西から）
　　b　ＳＢ１遺物出土状況（南から）
　　c　ＳＢ１完掘状況（南から）
図版2　a　ＳＢ２遺物出土状況（西から）
　　b　ＳＢ２完掘状況（西から）
　　c　ＳＢ２調査風景
図版3　a　ＳＢ３遺物出土状況（西から）
　　b　ＳＢ３遺物出土状況（東から）
　　c　ＳＢ３完掘状況（西から）
図版4　出土遺物

1　はじめに

日曽木遺跡の調査は，沼田川河川総合開発事業に係るものである。

沼田川は福富町内の鷹ノ巣山（標高922m）に源を発し東流する途中で入野川・椋梨川と合流しながら瀬戸内海に注ぐ，流域面積540㎢・流路延長49.4kmの二級河川である。流域一帯は温暖小雨の穏やかな気候であるが，降雨が梅雨期・台風期に著しく集中する事もあり，断続的に河川の改良事業を実施して，治水に努めてきた。

しかしながら，昭和54（1979）年・昭和60（1985）年・平成11（1999）年と相次いで重大な水害が発生しており，抜本的な治水対策が望まれることとなった。一方，沼田川水系の水は灌漑用水，水道用水，発電等さまざまな用途に利用されている。このような多目的な利用により，渇水期には水害とは反対にしばしば深刻な水不足に悩まされてきた。さらに，今後流域周辺での生産活動や宅地化等により水道用水の需要増大が予想されることから新たなる水源確保が緊急の課題となっている。これらの諸問題を解決するために本事業が実施される事となった。

広島県東広島土木建築事務所（現広島県東広島地域事務所，以下「東広島事務所」という）は平成５年11月４日付けで，事業予定地内の文化財等の有無および取り扱いについて，広島県教育委員会（以下「県教委」という）に協議し，県教委は事業予定地の一部について現地踏査を実施し平成12年９月20日付けで，周知の遺跡である福原城跡が存在するほか，遺跡の有無を確認するための試掘調査が必要な箇所が４箇所存在する旨回答した。

その後，東広島事務所から要試掘箇所の調査の依頼があったので，県教委では平成13年10月19日に東広島事務所の立ち会いのもとに，福富町教育委員会と共に試掘調査を実施し，当該予定地内に日曽木遺跡の存在を確認した。

この取り扱いについて県教委と町教委及び事業者である東広島事務所の三者で協議を重ねたが，遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達し，記録保存の措置をとることとなった。

これを受けて，東広島事務所は平成13年11月30日付けで県教委に対して文化財保護法第57条の３第１項に基づき埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）を行い，12月13日付けで，県教委は工事着手に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。東広島事務所は，翌平成14年１月28日付けで財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）に発掘調査を依頼した。センターではこれを受けて，埋蔵文化財保護法第57条第１項の規定に基づき３月18日付けで埋蔵文化財発掘調査の届出を県教委に提出した。また，東広島事務所とセンターは４月１日付けで委託契約を結び，４月８日～５月17日までの約一月間にわたり発掘調査を実施した。

本書は以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として，また，当該地域の歴史の一端を知る助けとなれば幸いである。なお，発掘調査にあたっては，広島県東広島地域事務所，福富町教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。

2　位置と環境

日曽木遺跡は，賀茂郡福富町久芳字日曽木2223-1に所在する。

本遺跡の所在する福富町は広島県のほぼ中央に位置する町で，賀茂郡内では北西端にあたる。昭和30（1955）年に豊田郡久芳村と竹仁村が合併して豊田郡福富町となり，翌年郡の再編成に伴い賀茂郡に属するようになる。昭和33（1958）年に河内町戸野の一部を上戸野として編入し，現在の町域の基礎がほぼ確定した。

町の総面積は60.7㎢で，町域は東西約12km・南北約９kmの扇形をしている。町の北部から西部にかけては鷹ノ巣山，金明山，野呂山など標高700～900mほどの山々が連なり，高田郡向原町と接している。また，東には西原山が豊栄町との境をなし，更に南に目を転じると段腹山が東広島市との境となる。このように福富町は全体としては四方を山で囲まれた盆地状の地形をしており，この盆地の中央部を沼田川が東丁田川や谷河内川などの小河川と合流しつつ西から東に流れ，賀茂郡河内町・豊田郡本郷町を経由して三原市で瀬戸内海に注いでいる。沼田川の源流域に該当するため，水源がそれほど豊かではなく，耕作地付近に灌漑用の溜池が大小を問わず数多く存在している。年間の平均気温は12～14℃と比較的冷涼で，５月ごろに霜の降りる時もある。年間平均降雨量は1,600㎜である。

町内での主たる可耕地の標高は，400～200mである。農業が盛んな地域であるが，近年は農家が減少傾向にあり，農業経営の近代化を図ることが重要課題となっている。さらに，総面積に対する森林面積の割合はおおよそ80％近くを占めており，森林資源の有効利用も重要な課題となっいる。

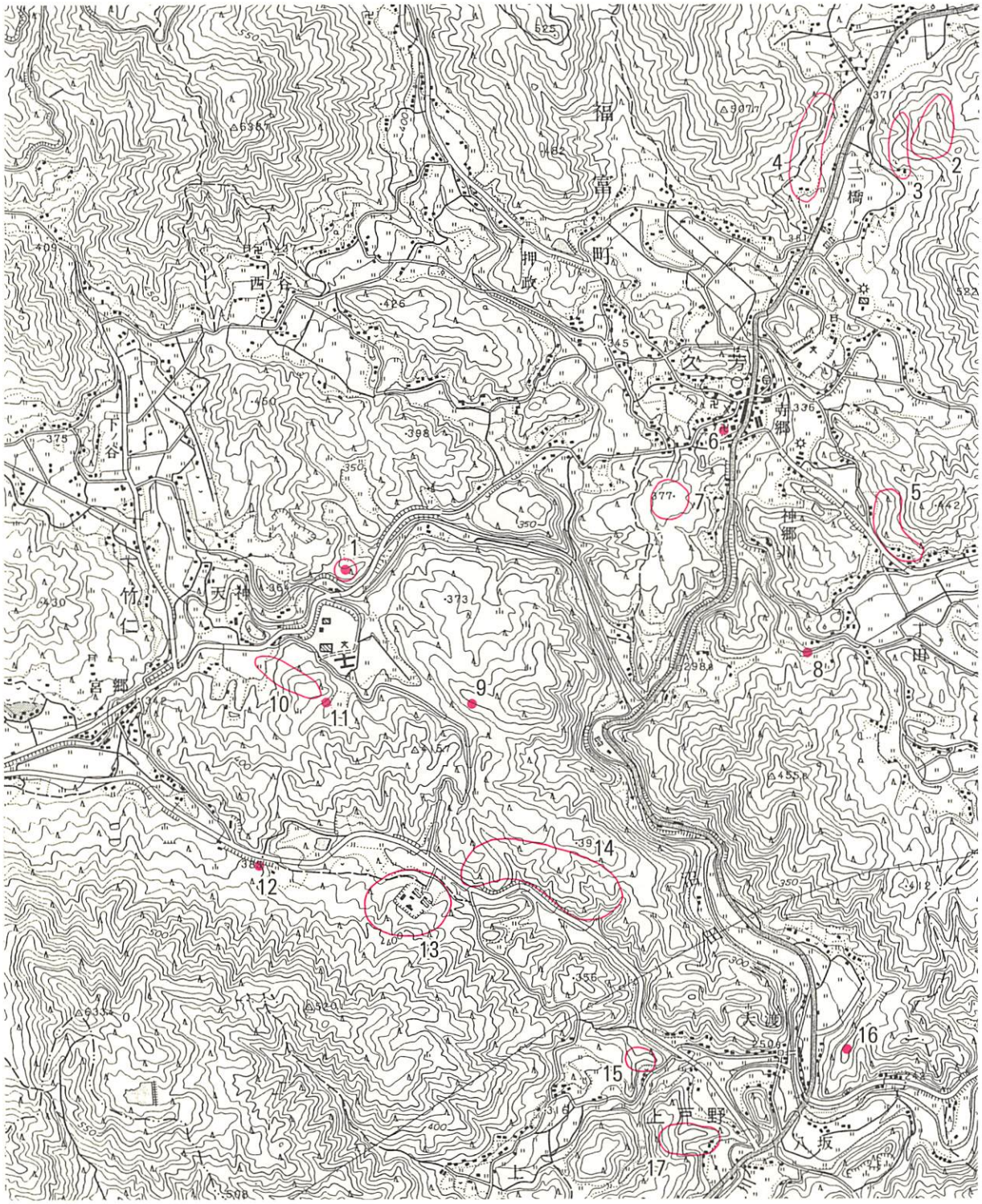
本遺跡は福富町の中心の久芳から南西に約1.5kmの下竹仁地区にあり，西から東へ伸びて沼田川を眼下に臨む尾根上に位置している。

福富町内での発掘調査は近年開発に伴い漸次増加しつつあるが，そのほとんどが古墳を中心とする墳墓の調査で，本遺跡のような集落関連の遺跡は意外と調査例が少なく，不明の部分が多い。ここでは主として原始・古代を中心に本遺跡周辺の歴史的な環境について概観したい。

縄文時代の遺物は金口古墳群の発掘調査時に出土している。内訳は石鏃・石錐・尖頭器・石匙などの石器である。なお，土器は出土していないが，今後発見される可能性は高いと思われる。なお旧石器時代の遺跡・遺物は確認されていない。

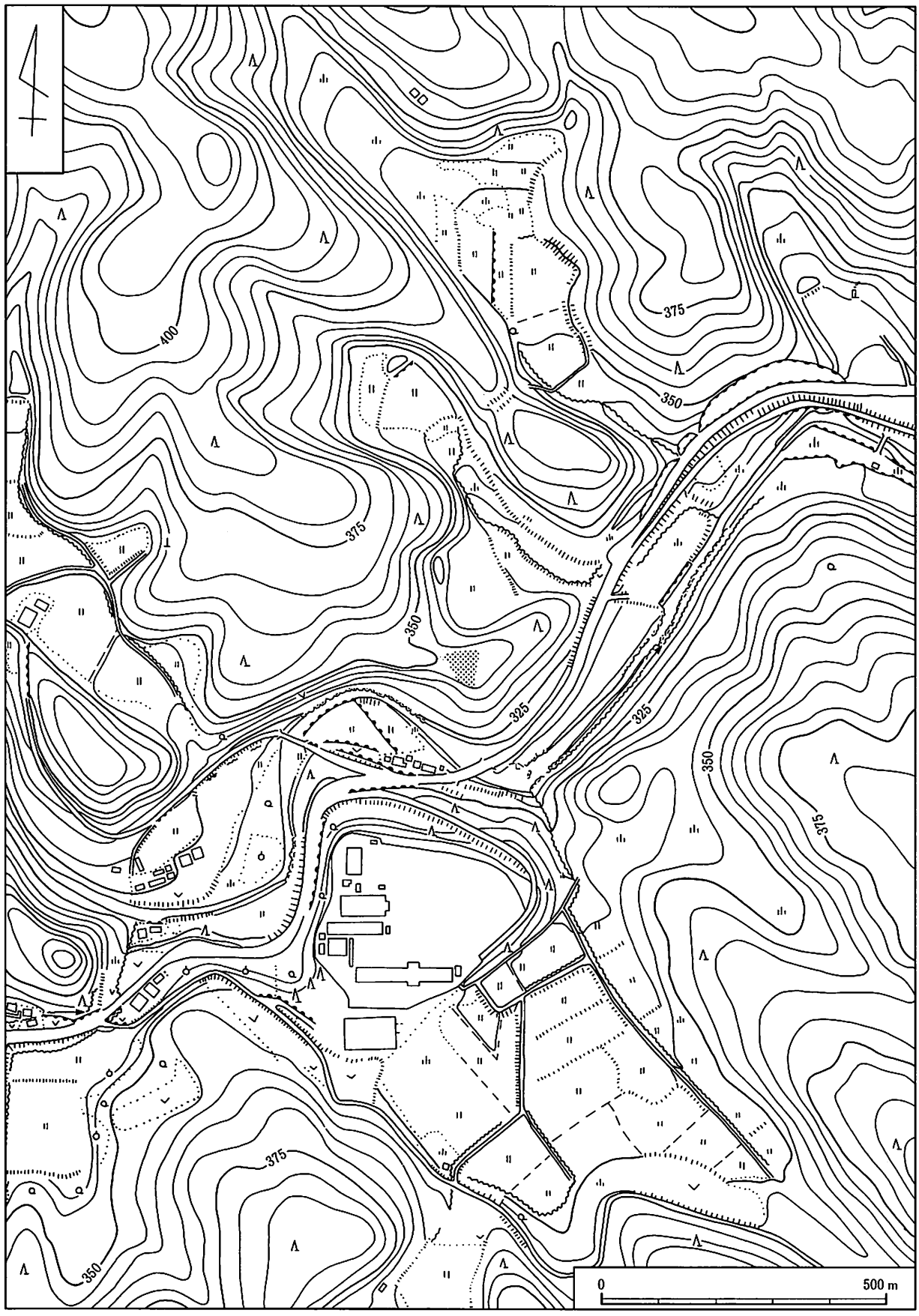
続いて弥生時代は杉風呂１・２号遺跡から石斧が出土しているほか，平が市遺跡，竹仁遺跡，正覚寺裏遺跡，十文字南第１・２号古墳などから土器の出土が確認されている。しかしながら遺構については未確認であり，集落跡あるいは墳墓の実態について，いまだ本格的な調査が実施されていないのが実情である。

さて，古墳時代の遺跡は前時代に比べると質量ともに増加する。さらにそのほとんどは集落跡ではなく，古墳である。松崎遺跡では住居跡と思われる遺構，須恵器・土師器などが出土しており，集落跡と想定されている。



1　日曽木遺跡　2　御子城古墳群　3　後谷古墳群　4　小松西古墳群　5　大丸山古墳群
6　正覚寺裏遺跡　7　金口古墳群　8　民貞古墳　9　福富中学校裏古墳　10　二反田古墳群
11　二反田遺跡　12　竹仁遺跡　13　西田河内古墳群　14　東田河内古墳群　15　松ノ木古墳群
16　貝峠古墳　17　下平古墳群

第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000）



第2図　遺跡周辺地形図（1：5,000）アミ目は日曽木遺跡

古墳は町内ではおよそ80基[1]ほどが確認されている。ただし未確認の古墳もあると思われるので実数としては増えるであろう。調査例が少なく内容については不明の部分が多いのが実情である。

本事業に係って調査を実施した金口古墳群[2]では箱式石棺を埋葬施設とする円墳で構成されており，おおむね６世紀の前半期に造られたようであり，これより以前の状況については不明である。古墳群の中にも古式の様相をもつ古墳が若干ではあるけれども存在するので，古墳間での時間的な変遷が想定できる。また，ほぼ同時期と推定される松ノ木古墳[3]も円墳で，埋葬施設が箱式石棺である。

後期の古墳は直径10m，高さ１～２m程度の墳丘を持つ横穴式石室を埋葬施設とするものが大半を占めており，谷間の平野部を見下ろす小高い場所や小さい谷の奥に築造されたものが多い。さらに，単独で存在する古墳は少なく，２～10基程度にまとまっており，全体として群を構成する例が多い。このような古墳群は田口山古墳群（２基），西田河内古墳群（４基），下平古墳群（５基），丁田南古墳群（４基），小松谷東古墳群（９基），小松谷西古墳群（７基）[4]，松崎古墳群（７基），犬丸山古墳群（６基），二反田山古墳群（２基）十文字南古墳群（３基），十文字古墳群（２基），塚平古墳群（４基）などが確認されている。

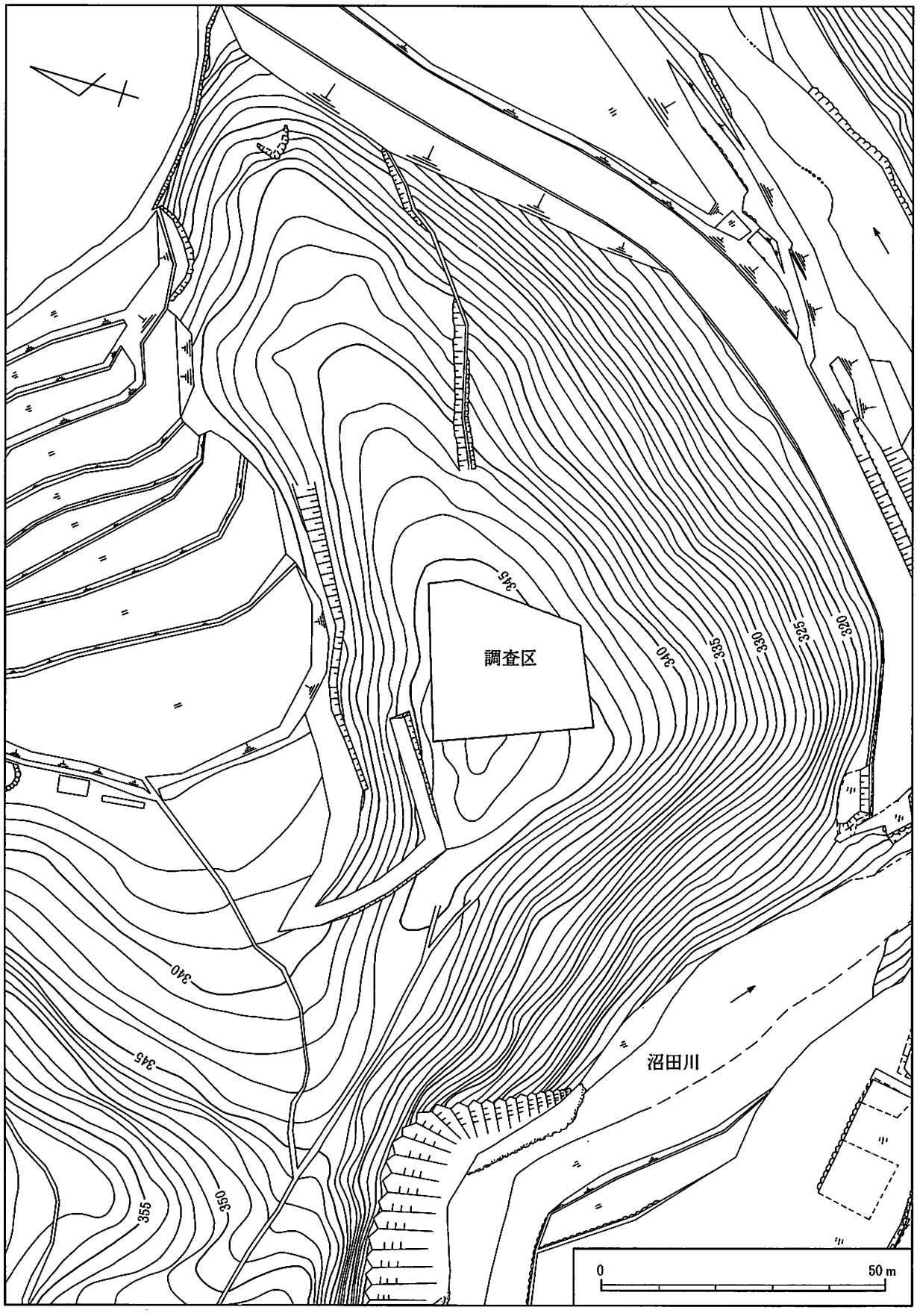
丁田南古墳群（第１～４号古墳）のうち，丁田南第３号古墳[5]は，遺存状況が不良であったものの，長さ４mの小規模な横穴式石室を埋葬施設にしており，須恵器が出土している。時期については７世紀第１四半期と報告されている。さらに，本事業に伴って福富中学校裏古墳[6]の調査がされている。この古墳は長さ7.3mの無袖の横穴式石室を埋葬施設としており，原位置を保っていないものの須恵器・鉄器・耳環・玉類などの豊富な遺物が出土している。時期は６世紀後半から７世紀の初頭と報告されている。

同時期の遺物としては貝峠古墳から須恵器の鳥形瓶が，また丁田南古墳群の辺りから環状瓶が出土したと伝えられている。この須恵器についてはその特異な分布状況とも相まって早くから注目されており[7]，梅木平古墳や御年代古墳などを築造した沼田川下流域との関係を考える上で重要な資料となっている。

古代の遺跡は未見であるが，文献資料としては和名類聚抄に阿芸国沙田郡訓芳郷の地名がみられ，後には久芳郷・久芳保と称されている。

註

(1) 広島県教育委員会 『広島県遺跡地図Ⅱ』 1994年
(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『金口古墳群』 1997年
(3) 潮見 浩 「広島県賀茂郡松の木古墳」『日本考古学年報』10 日本考古学協会 1982年
(4) 脇坂光彦 「小松古墳」『探訪・広島の古墳』 芸備友の会 1991年
(5) 福富町教育委員会 「丁田南第３号古墳」 1994年
(6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『福富中学校裏古墳発掘調査報告書』 2001年
(7) 河瀬正利 「広島県出土の鳥形須恵器」『芸備古墳文化論考』 芸備友の会 1985年



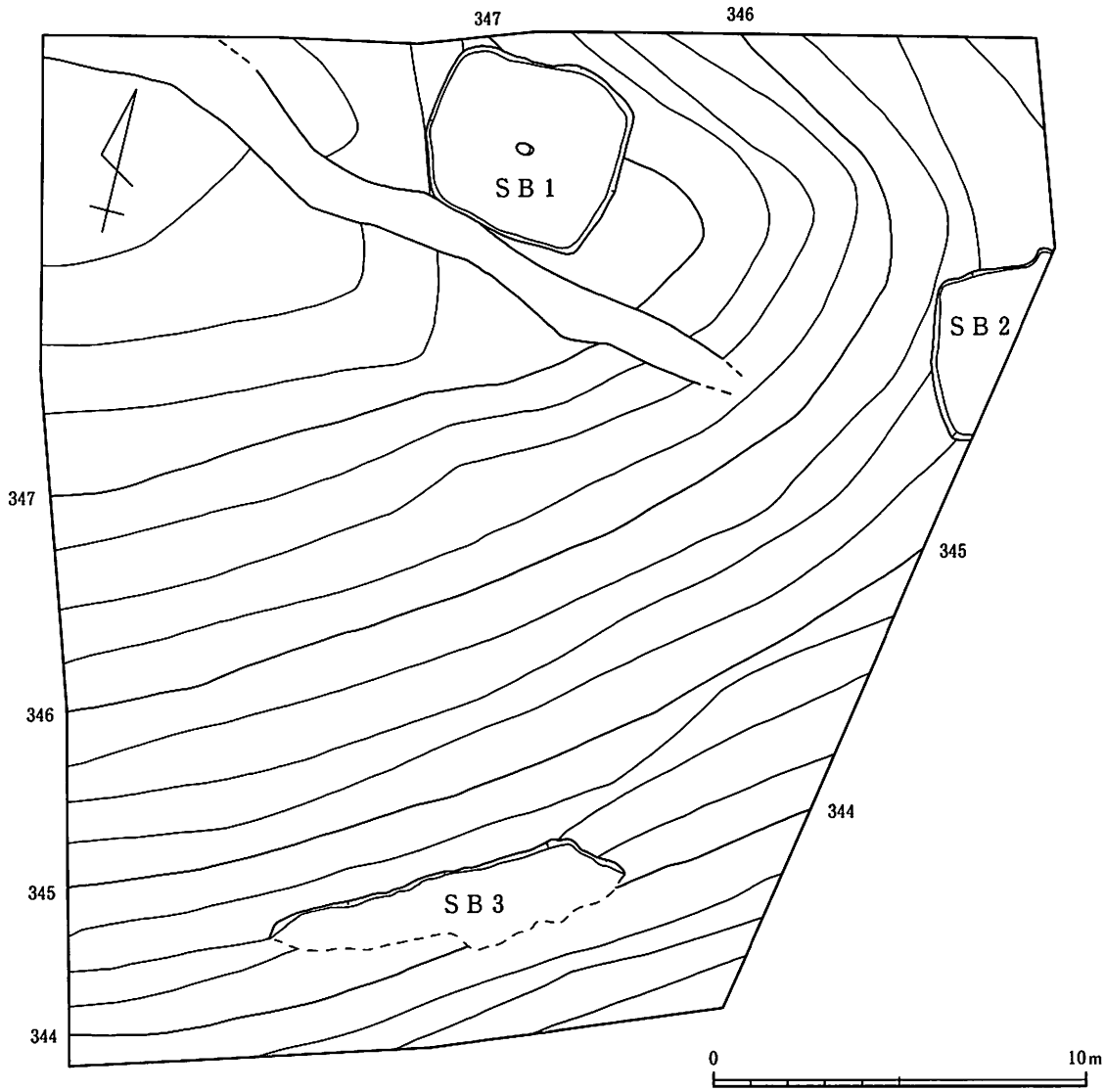
第3図　遺跡地形図（1：1,000）

3　調査の概要

遺跡は北から南にかけて緩やかに伸びた尾根の先端部にあり，南側には眼下に沼田川を一望できる。遺跡の北側は谷が入っていて，細尾根の南北両側は共に急傾斜になっている。なお，本遺跡は沼田川の源流域付近に位置しており，遺跡と河床の比高は約50mである。

調査は試掘調査時の資料を基にして，現表土下約40cmを機械による排土作業を実施し，その後人力による遺構検出作業を行った。調査面積は約500㎡である。

調査の結果，竪穴住居跡２軒（ＳＢ１，ＳＢ２），段状遺構１基（ＳＢ３）を検出した。竪穴住居跡はいずれも西から東に緩やかに傾斜する尾根の中央部にあり，段状遺構はこれらとは若干離れた南側の斜面にあった。竪穴住居跡はいずれも火を受けた痕跡があった。竪穴住居跡１棟は調査区境で検出したので，完掘できなかったが，中央北端で検出した竪穴住居と同様の方形の住居跡と思われる。



第４図　遺構配置図（１：200）

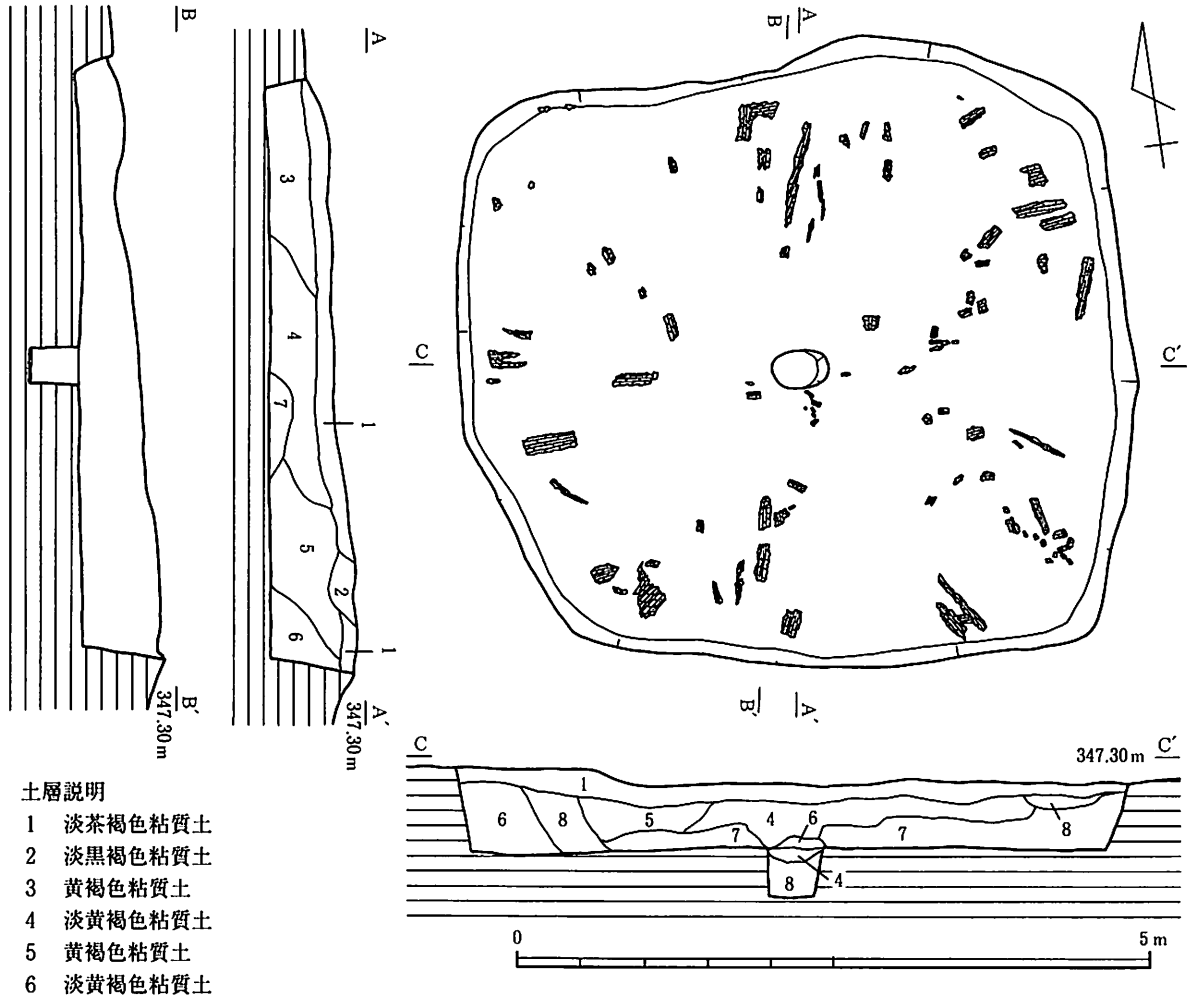
4　遺構と遺物

遺構

ＳＢ１（第５図，図版１）

遺跡の平坦部のほぼ中央で検出した遺構である。住居跡の平面形に沿って幅10cmほどの焼土が巡っていた。なお，外側の地山と住居内に埋没していた土は同様の堅さをしており，平面形に沿う焼け土が存在していなければ，見分けが付きにくい状況であった。

住居跡の平面形は細かく見ていくと，東辺と南北辺は隅の部分が丸くなるもののほぼ方形をしている。しかしながらこれに対して西辺は中央部が南北辺よりも50cmほど若干飛び出しており，変則的な五角形をしているとも解釈できる。あるいはこの飛び出しがゆがみの範囲であると許容できるのであれば，一辺が約５ｍの方形の住居跡とも解せるであろう。いずれにしても西辺中央部の突出はこの住居跡が通常の方形の住居跡とは若干違った様相を示していると解することがで



土層説明
1　淡茶褐色粘質土
2　淡黒褐色粘質土
3　黄褐色粘質土
4　淡黄褐色粘質土
5　黄褐色粘質土
6　淡黄褐色粘質土
7　赤褐色土（焼土）
8　黄褐色粘質土

第５図　ＳＢ１実測図（１：60）

きる。

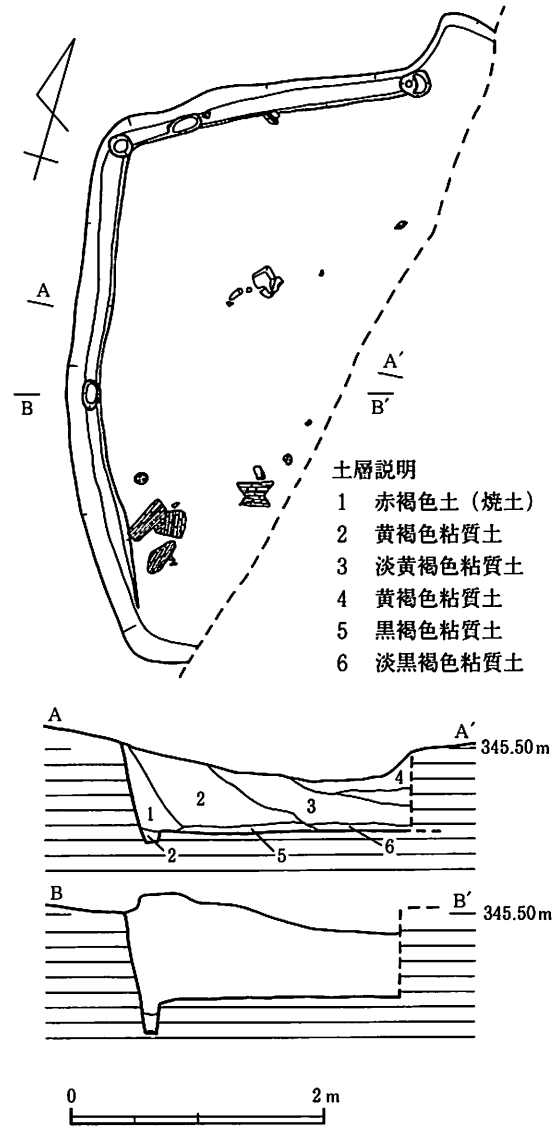
床面までの遺構検出面からの深さは70～80cmあり，よくしまった黄褐色粘質土が堆積していた。この堆積土は前述したように地山土とほぼ同程度の堅さであり，掘り下げに苦心した。さらにこの粘質土中には焼土，炭化物がたくさん含まれていた。特に床面近く20cmほどは顕著に焼けており，炭化物もまとまって出土した。ただし，全般的に炭化物の遺存状況は良好とは言えないが，部分的に良好な状態で検出できたところも存在する。炭化物の遺存の程度は燃焼時の燃焼の状況をある程度反映していると考えることも出来るので，この住居跡の場合は南東付近の遺存が悪かったことや中央部やや北東側の焼け土がかなり堅く焼けていたことなどから，全般的に東側が良く燃えたとも考えられる。

床面付近で検出した炭化物の状態を観察すると，まばらではあるけれでも遺存した炭化物のうち燃焼時の木材の方向が判明する資料が少なからず存在する。そこで，これら炭化物の方向を見てゆくと，放射状に中央部の小ピットに向いているものが比較的多い。このほかには壁の方向に平行するものが数点見受けられる。

本住居跡に伴う壁溝は検出できなかったが，中央部に伴うと思われるピットを確認した。48×30cmの楕円形をしており，深さ40cmである。内部には柱根らしき痕跡はなかった。ただし，上面に炭化物が若干出土しており，混入の可能性も否定出来ないが，柱穴であった可能性が大である。これ以外には床面上で付属の遺構を確認できず，一本柱構造の可能性がある。

また住居跡に伴う遺物も発見出来なかった。このようなことから恒常的に家屋として使用した住居跡というよりもどちらかといえば物置場あるいは軽作業場と想定できる。柱穴と炭化物の関わりから，上屋は確実に存在すると思われ，具体的な構造については検討の余地があるものの，少なくとも雨露を凌ぐ程度の機能は有していたと思われる。

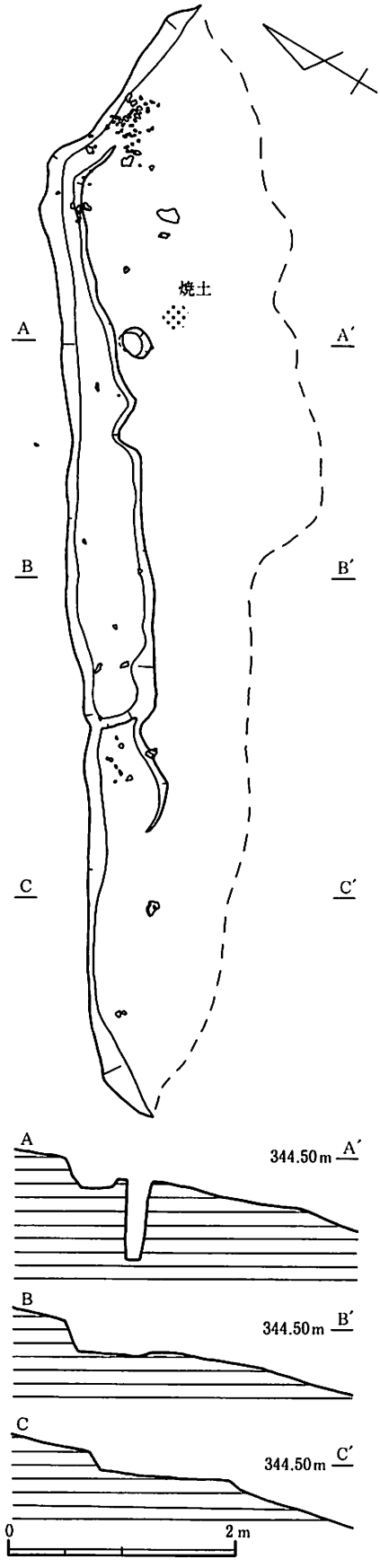
また，炭化物や焼土の状態からは失火であるのか，廃絶後意図的に燃やしたものかは断定できない。



第6図　ＳＢ２実測図（１：60）

ＳＢ２（第６図，図版２）

遺跡の東側調査区境に位置しており，前述したＳ



第7図　ＳＢ３実測図（１：60）

Ｂ１から10mほど東にある。調査区境に位置するため完掘できなかった。推定できる大きさからほぼ１／３を調査したと思われる。

完掘していないのでつまびらかな状況は不明であるが，調査した範囲では西側で隅が若干丸いもののほぼ直線になることから，これを一辺と見ることができよう。したがって，おおむね一辺が５ｍ程の方形ないしは長方形の竪穴住居跡と推定できる。

遺構検出面から床面までの深さはおおむね70～80cmであった。これはＳＢ１とほぼ同じである。埋土は少し暗い黄褐色土が充満しており，床面近くには炭化物と焼土が堆積していた。断面の観察によれば床面の直上に薄く炭化物と焼土の層が存在すること，さらに壁近くの土はある程度土が堆積してからその上に前述した炭化物＋焼土が堆積していることから推測して，本竪穴住居跡は上屋がある程度埋没した時点，つまり，窪み状に上屋が倒壊した時点で火を受けているようである。

また平面形に沿って床面には壁溝が巡っている。壁溝は幅10cm・深さ10cmほどであった。さらにこの壁溝内の所々に直径10～15cm，深さ20～25cmの小ピットが配されている。この小ピットは壁溝に伴うと思われる。おそらくは適度な間隔を置いて配されていたと思われる。なお，この小ピット以外に現状では柱穴は確認できなかった。未調査部分に存在する可能性もある。

ＳＢ３（第７図，図版３）

遺跡の南側斜面に存在する段状遺構である。ほぼ等高線に平行して構築されている。遺存長は東西方向に長さ10mで，床面は南北方向に幅１～0.5m残存する。東西両側の遺構の端はわずかに丸みを帯びて南側に屈曲するが，立ち上がりは周囲の自然地形に移行してやがて消滅する。遺構の南側が斜面のため流失しているので，全形を窺いえない。

遺存状態が比較的良かった北側部分では，平面形に沿って床面に幅10cm深さ10cm程の溝が巡っている。この溝は

東端付近の遺物集中出土部分付近から始まって西に6.4mのところまで伸びている。

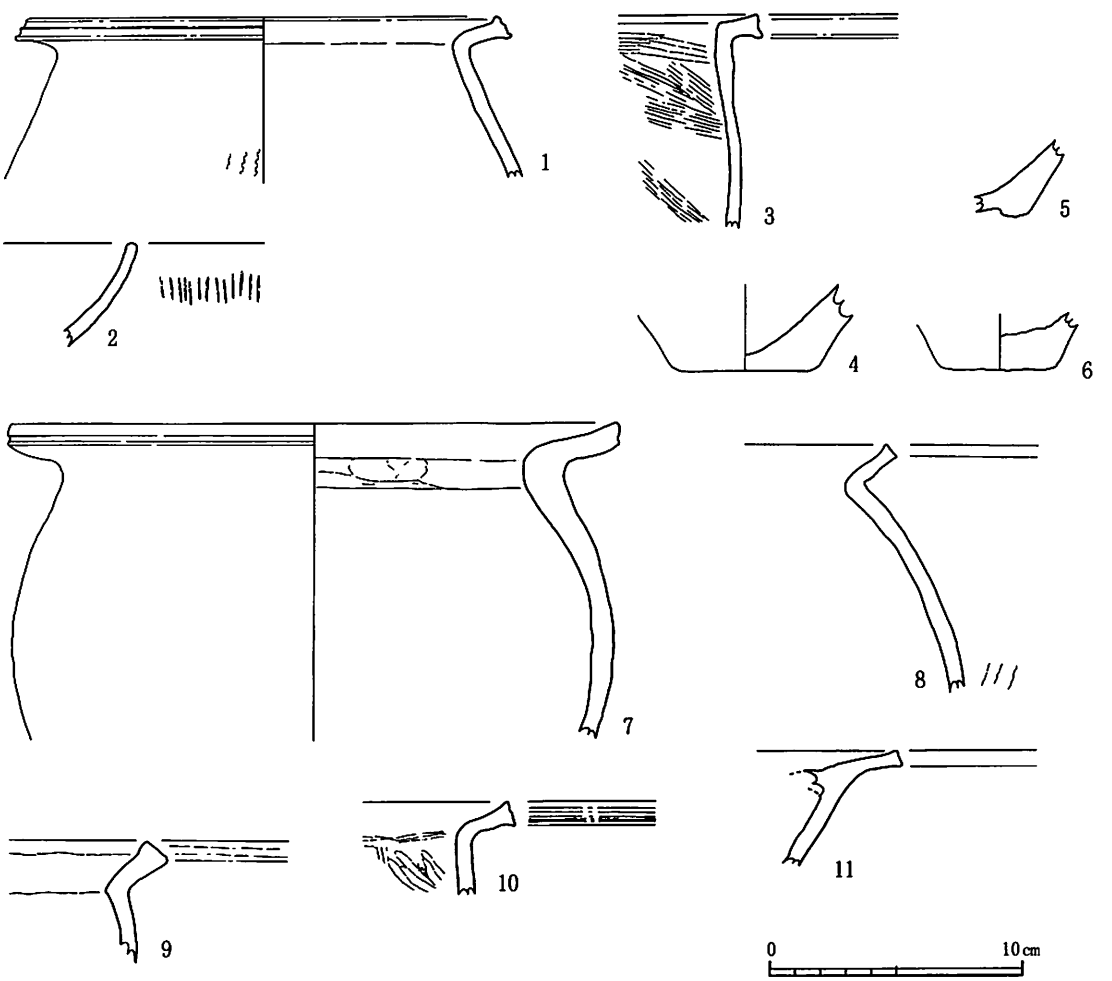
また東端部から３ｍの所には直径20cm深さ50cmの柱穴が存在する。対応する柱穴は確認できなかった。さらにこの柱穴から30cm南側には直径40cmの円形の赤変した焼土部分が存在する。この焼土は床面に伴うと考えられる。

本遺構からは弥生時代後期頃の土器が出土している。床面の直近から出土しているので，ほぼ同時期と見なして差し支えないであろう。

遺物（第８図，図版４）

本遺跡から出土した遺物は弥生土器である。これらの土器はおおむね弥生時代中期末から後期前半の様相を示しており，器種は甕がほとんどである。遺構内から出土した遺物は僅少で遺構が使われた年代を示すには十分とは言いがたい。とりわけ，頂部の尾根線上に存在するＳＢ１からは磨滅を受けた破片が出土したが，図化できるような土器は出土しなかった。

遺構内から出土した遺物の大半はＳＢ３からの出土で，ＳＢ２からは僅かに破片が数点出土し



第８図　出土遺物実測図（１：３）

たにとどまる。この他には遺構から遊離して出土した遺物がある。また，一部の遺物は遺跡の北側の法面で表採したものもある。

1はＳＢ２の床面付近から出土した甕形土器の胴部上半から口縁部片である。復元口径は18.5cm，復元頸部径は15.0cmである。胴部上半にはヘラ状工具の端部を利用した連続刺突文が巡っている。胴部から頸部にかけては緩く窄まり気味に伸び，頸部付近で一転して「く」字形に強く外反する。外反した口縁部は上方にややつまみ上げ気味に拡張されており，口唇部に２条の凹線が巡る。遺存状況が悪いので調整等不明の部分が多いが，胴部内面はヘラ状工具によるナデ，口縁部付近が横方向のナデである。色調は内外面共に明黄褐色で，焼成は良好である。遺存状況はやや不良で器表面の剥落や風化が見られる。

2もＳＢ２から出土した鉢形土器である。緩やかに立ち上がって僅かに内湾しつつ口縁端部にいたる。口縁部は丸みを帯びており，口縁直下にはヘラ状工具による連続刺突文が巡っている。内外面共に横方向のナデで器表面を調整しており。色調は内面が淡赤橙色・外面淡黄褐色である。焼成は普通で，遺存状況はやや不良で，外器面が若干磨滅している。

3～6はいずれもＳＢ３からの出土である。

3は甕形土器の胴部上半から口縁部片である。胴部は頸部付近で心持ち内側に傾くもののほぼ直立し頸部で直角に折れて短く外反する。口縁端部は上下方向に僅かに拡張され緩く凹線状に窪んでいる。調整は内面は斜め方向のハケ目。口縁部と胴部の境に稜が走っている。口縁部の付近は横方向のナデである。色調は内面は淡黄褐色・外面は黄褐色である。焼成は良好で，遺存状況は普通であった。

4は底部片である。復元底部径は5.0cm。平底である。中央部はかなり窪むが器壁は厚い。色調は内面は淡黒灰色・外面は淡黄褐色であった。焼成は良好で，遺存状況は普通である。

5は底部片である。中央部が体部と接する部分よりも薄くなっており，窪んだ平底状をしている。色調は内外面共に淡黄褐色で，焼成は普通で，遺存状況はやや不良で，特に外器面の剥落が著しい。

6は底部である。底部径は4.6cmである。平底で，体部と接するあたりまで器壁が厚く一定しておりほんの少し中央部が薄くなる程度で内外面共にほぼ平坦となっている。色調は内面が淡黄褐色・外面が明黄褐色である。焼成は普通で，遺存状況も普通であったが，若干磨滅気味ではある。

7～11は調査区内から出土したものである。いずれも遺構からは遊離した状態で出土している。

7は甕形土器の胴部中位から口縁部片で，復元口径23.7cm，復元頸部径16.4cm，復元胴部最大径23.7cmである。胴部は最大胴部付近から緩く弧を描いて，頸部にいたる。頸部で強く「く」字形に外反し，やや上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は平坦であるが，端部中央より下方に凹線が一条巡る。遺存状況が不良のため調整等については不明の部分が多い。色調は内面は淡黄褐色・外面は黄褐色で，焼成は普通であった。

8も甕形土器で，胴部上半から口縁部片である。胴部は最大胴部付近のやや上方にヘラ状工具

による連続刺突文が巡っている。頸部にかけては割と強く弧を描きながら窄まってゆき頸部では「く」字形に上方へ開き気味に外反して短く伸びて口縁端部にいたる。口縁部は端面を持ち若干上方向に拡張されている。色調は内外面共に黄褐色で，焼成は良好である。また遺存状況も良好であった。

9は甕形土器の口縁部片である。ほぼ直立気味の胴部は頸部付近でゆるく「く」字形に外反し短く外上方に伸びて口縁端部にいたる。口縁部は上方に心持ち拡張されており，平らな端面を持つ。調整は全体的にナデている。色調は内外面共に明黄褐色で，焼成は普通である。遺存状況は普通であったが，若干磨滅気味ではある。

10は甕形土器の口縁部片である。ほぼ直立する胴部は頸部付近で強く「く」字形に外反し短く外側に伸びて口縁端部にいたる。口縁部は上下両方向を拡張し，平らな端面を作出する。口唇部には凹線文を3条巡らせる。調整は内面は横方向にナデさらに部分的に磨きを施す。口縁部周辺は横方向のナデを施す。色調は内外面共に黄褐色で，焼成は良好，遺存状況も良好であった。

11は口縁部であるが，器種については不明である。形状からすれば高坏の可能性が大であるが，小片のためつまびらかに出来ない。やや外側に広がりながら口縁部に至る。口縁端部には端面を持つ。さらに内面には屈曲部付近から内側へ折り返しが付いている。端部が欠損しているので折り返しの状態には不明な点が多い。調整は全体的にナデている。色調は内外面共に黄褐色で，焼成は普通であるが，遺存状況は不良であった。

5　ま　と　め

日曽木遺跡では前章で詳しく見てきたように，竪穴住居跡と段状遺構を検出し，それらはおおむね弥生時代中期末から後期の初頭に位置付けられた。ここでは竪穴住居跡について若干の検討を加えて，まとめとかえたい。

今回発見した住居跡はいずれも尾根の稜線上の狭い平坦面を利用して構築している。全体の地形及び調査時の遺構の配置状況からすれば，調査地点は集落跡の西側に当たると思われ，狭小な尾根上に竪穴住居跡が点在する様子が窺える。全体を調査したわけではないので，不明な部分は多いのであるが，地形的に見ても南北方向には竪穴住居跡が１軒程度しか空間がとれないことなどからも，密集するような集落ではなくて，２～３軒程度の規模であったのではないかと推測出来る。

こういう状況を考慮して，今一度ＳＢ１について検討してみよう。前章で検討したように，恒常的な住居とするには構造が単純な一本柱であることから，重層的な上屋構造は想定し難い。したがって，比較的簡単な軽量の上屋を想定するのが自然であろう。

上屋の構造が軽量である事から推測すると，基本的に雨露だけを凌げればよいわけであるから，すくなくとも非定住的，人が恒常的にそこで寝食をするような場としての性格は薄いと考えられる。しかも,この施設は集落になくてはならないものであるから，集落を構成する人々が日常的にとはいかないまでも継続的に使用する施設＝日常生活を支援する場所であろうという推測が成り立つ。

一方，上屋構造の単純さが必ずしも住居跡以外の施設を示すものではないとの考えもある。例えば，夏場と冬場で住居を換えるやり方などは現在では確認できないけれども，積雪地帯ではまま見受けられる事例である。同様の現象が本遺跡にも当てはまる可能性は否定できない。

一般に竪穴住居跡はその名の通り住居跡として認識されている。なるほどこれらの全部ではないにしても多くが住居跡であろうと想像するに難くない。同様に住居跡以外の機能も想定できる場合もあって，それらは例えば一般の住居跡より規模が極端に大きかったり，あるいは小さかったり，あるいは簡素であったり，あるいは道具を作った跡があったりと様々である。

本遺跡の場合は共伴遺物がないことから具体的な性格については不明と言わざるをえない。位置的には沼田川を見下ろす絶好の位置にあることなどから，ＳＢ１が漁労に関連する遺構であった可能性もあろう。また竪穴住居跡（ＳＢ１，ＳＢ２）と段状遺構（ＳＢ３）の関係についても，両者がほぼ共存したと考えられる事から，性格や機能分担を含めて検討の余地がある。沼田川沿いの集落跡の実体が判明していないことから，今後の展開を見て再考する必要があろう。

図版１

a　遺跡全景（西から）

b　ＳＢ１遺構検出状況
（南から）

c　ＳＢ１完掘状況
（南から）

図版 2

a　ＳＢ２遺物出土状況
（西から）

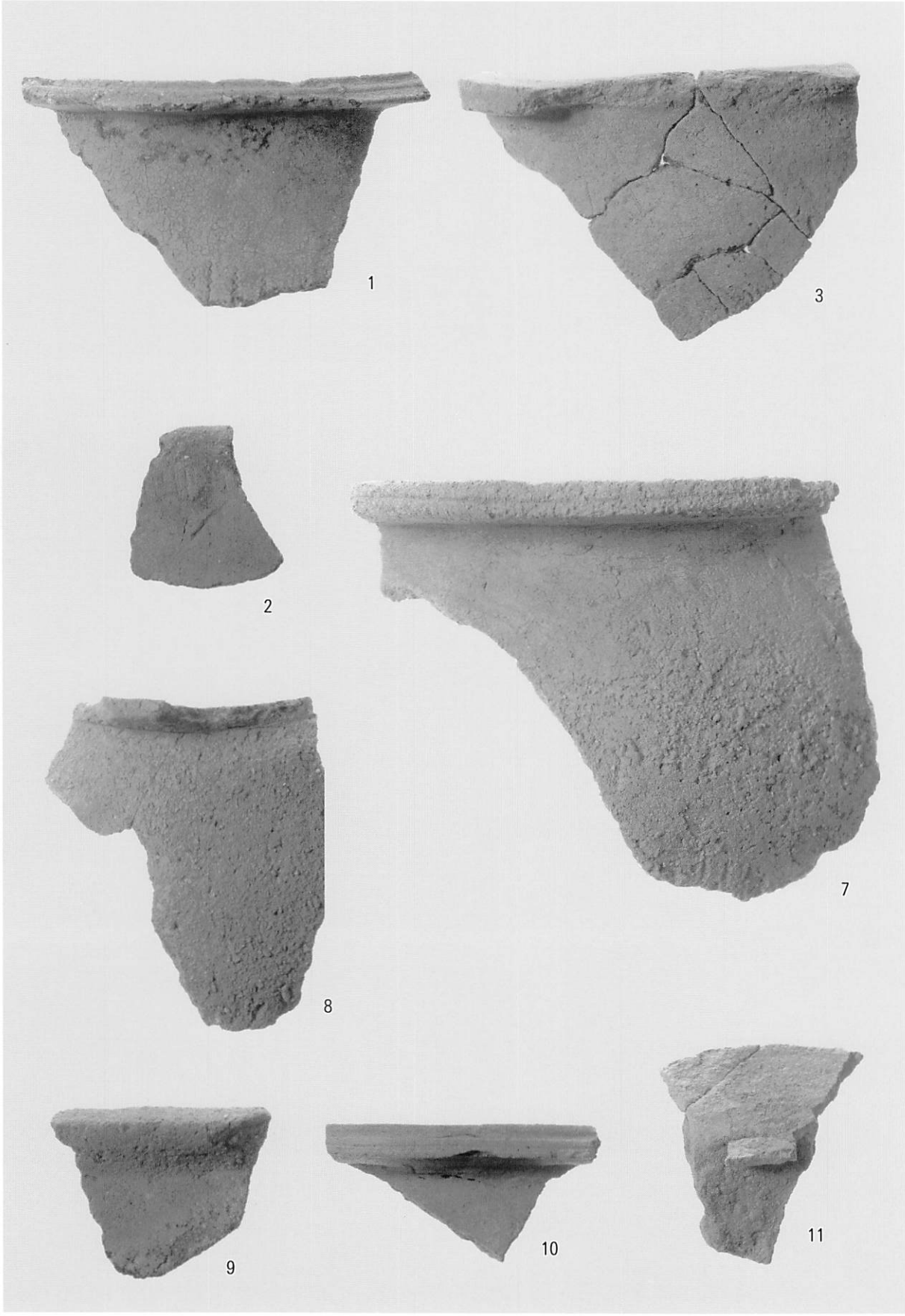
b　ＳＢ２完掘状況
（西から）

c　ＳＢ２調査風景
（西から）

a　ＳＢ３遺物出土状況
（西から）

b　ＳＢ３遺物出土状況
（東から）

c　ＳＢ３完掘状況
（西から）



出 土 遺 物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひそぎいせき
書名	日曽木遺跡
副書名	沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第208集
編著者名	辻　満久
編集機関	財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
日曽木遺跡（ひそぎいせき）	広島県賀茂郡福富町大字久芳字日曽木2223-1（ひろしまけんかもぐんふくとみちょうおおあざくば あざひそぎ）	34405	115	34度 31分 45秒	132度 45分 05秒	20020408 ～ 20020517	500	沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日曽木遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居跡　２軒 段状遺構　１基	弥生土器	

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第208集
沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
日 曽 木 遺 跡
発 行 日　2003（平成15）年３月31日
編集・発行　財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3951
ホームページ　http://hmaibun.d-net.co.jp
印 刷 所　至誠堂印刷株式会社